

1 評価の基本的な手法

(1) 環境影響の回避・低減に係る評価

環境保全措置について、対象事業の実施に伴う景観への影響が可能な限り回避され、又は低減されているものであるか否かについて評価を行う。

(2) 国又は地方公共団体の環境保全施策との整合性

予測結果が、国又は県、関係市町村が実施する環境の保全の観点からの施策による基準や目標と整合が図られているかどうかについて評価する。

環境基本計画等に掲げられた目標、水準等が示されている場合には、その達成状況や計画等との整合性についての検討・評価を行う。

景観に係る価値軸

価値軸の種類		内 容
非日常的	多様性	景観を構成する要素の種類が多いものほど、また、その構造が複雑なものほど、多様性は高くなる。ただし、開発による人工的要素の増加などの自然性の低下を伴う多様性の取扱いについては、細心の注意が必要である。
	自然性	自然的な景観構成要素の占める割合が高いものほど、また人為による改変の程度が低いものほど、自然性は高くなる。
	審美性	多くの人々がより美しいと感じるものほど、審美性は高くなる。
	傑出性	日本一〇〇、日本三〇〇など、他のものに比べて優れているものほど、傑出性は高くなる。
	固有性	景観を構成する要素の持つ個性、印象の強さ、珍しさ等が際立ったものほど、固有性は高くなる。
	利用性	視点を利用する人数が多いものほど、視点へのアクセスの利便性が高いものほど、利用性は高くなる。
	眺望性	視点からの視界が開放的であるもの、景観資源の規模の大きいもの、被視頻度が高いものほど、眺望性は高くなる。
日常的	歴史性	地域の歴史に密接な関連性を持つものほど、歴史性は高くなる。
	郷土性	地域の風土を表し、地域のシンボリック存在として認識されているものほど、郷土性は高くなる。
	親近性	地域住民に広く親しまれているものほど、親近性は高くなる。
	快適性	豊かな生活環境を構成する緑地等、多くの地域住民が快適と感じるものほど、快適性は高くなる。
	視認性	地域住民の日常生活空間から眺められる可能性が高いもの（被視頻度が高い又は認知されやすいもの）ほど、視認性は高くなる。

また、保全水準の達成の検討・評価の例を次に示す。

ア 保全水準の達成の程度

保全対象ごとに各価値軸上における評定結果から重要度区分（価値区分）及び保全水準を設定し、主たる価値軸の種類と重要度の判断理由を付して保全目標の一覧表を作成する。

重要度区分	保 全 水 準	
Aランク	努めて保全	(厳正保護)
Bランク	相当程度保全	(適正保全)
Cランク	影響を努めて最小化 (維持努力)	

保全水準の達成の程度については、保全対象ごとに、次の3段階区分により判定して、分かりやすく取りまとめる。

なお、景観の構造は複雑であり、構成要素も多種多様である。また、景観を認識する人間そのものにも、景観変化に対する反応の個人差が認められる部分もあるため、予測結果には不確実性が残ることに留意する必要がある。

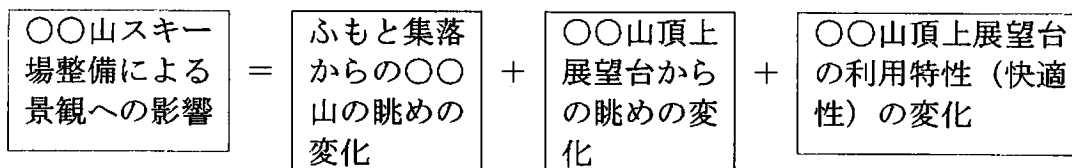
保全水準の達成の程度の判定

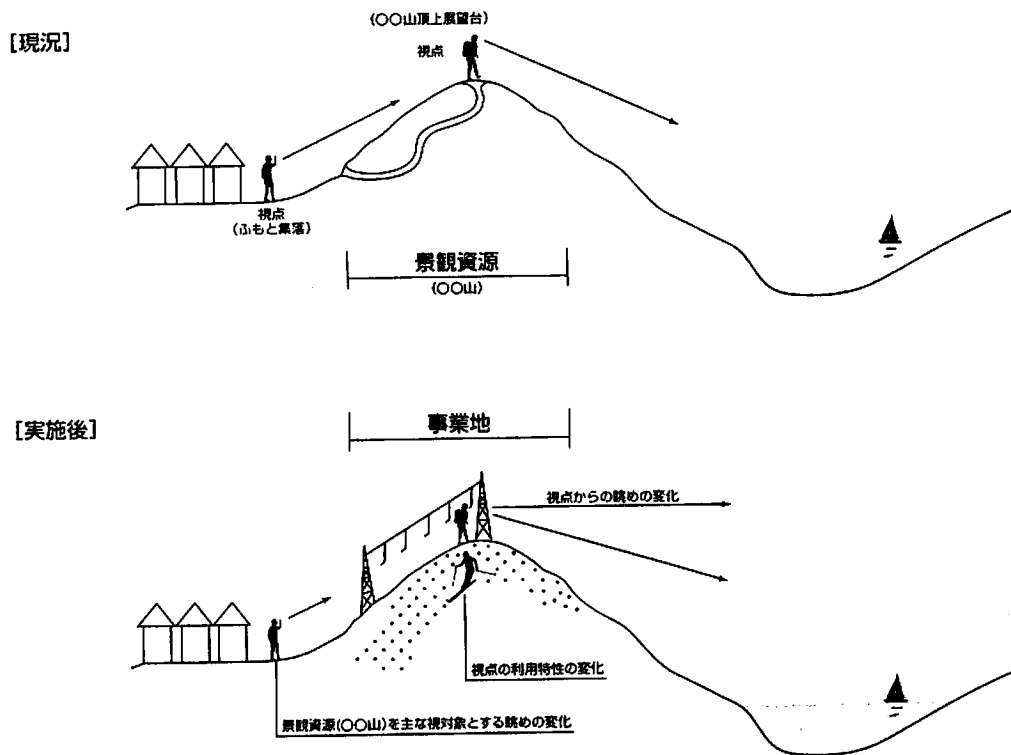
段階区分		判 定 内 容
達成 ○	○ ₁	完全に達成していると判定される場合。予測結果に残された不確実性に起因する問題の発生は、全くないと見なされるもの。現実には稀なケースである。
	○ ₂	達成していると判定される場合。予測結果に残された不確実性に起因する問題が発生しないことを、念のために確認する事後検証のための継続調査を伴う。
ほぼ達成 △		ほぼ達成していると判定されるが、予測結果に不確実性が多く残る場合（保全対策の効果に不確実性が多く残る場合を含む。）予測結果に残された不確実性に起因する問題が発生した場合には保全対策の追加等の措置を講じることを想定した、継続監視のための継続調査を伴う。
未達成 ×		保全対策の実施の如何にかかわらず、達成の可能性が極めて低いと判定される場合

なお、判定に当たっては、次の事項に留意する必要がある。

①複数の影響の総合化

次のような場合は、3つの影響を総合化して判定する必要がある。





②各保全対象の重要度に応じた達成の程度の判定

次のとおり重要度の高いものほど達成の程度の判定は厳しくなる。

保全対象の損壊率\重要度区分	Aランク	Bランク	Cランク
比較的大きい	×	×	△
↑	×	△	○ ₂
↓	△	○ ₂	○ ₁
比較的小さい			

③代替性等の保全対象の特性の考慮

(例)

